

んだってことも慣れていなかった。「面倒見てくれるんだ。」「ただ来て、薬を置いていくだけではなくて、褥瘡の手入れもしてくれるんだ。」そういう事がまず始まりでした。医療救護班のなかにJRSがあって、医者、歯科、看護師、栄養士や、リハ職も入っていた。連携しなければならない職種がみんな参加していた。それぞれやりたいことをやっていたら崩壊状態になるので、お互い相談しながら活動しました。医療救護の時期が過ぎていった頃、『これで終わりね』というのはさすがにもったいない。その発展形として、気仙沼・南三陸地域在宅医療福祉推進委員会という形で残った訳です。

もう一つKNOAH（ノア）は、当時医師会長だった大友先生から、「東北大の先端医療研究所で、在宅医療のシステムを作ってみたから、実証実験をやってくれないか。」と声をかけられ、たまたまJRSで顔なじみになっていた菅原先生、小松さん、武田先生に声をかけて、相談したのが始まりです。

しかし、集まって話し合ってみたものの、お互いが、自分以外の職種が「どんなことができるのか。どんなことをやっているのか。」を解っておらず、互いの職種を理解していないことに気がついて、お互いのことをまず理解しなければ、相手にものを頼めない。こちらも頼まれても困る。頼まれてもできないものはできないし。そこで、システム云々の以前に、「自分以外の職種がどんな仕事をしていて、何で困っているのか等を知らなきゃならないね」となり、多職種の方に声をかけて集まってもらったんです。

それと、能力的にできることと制度的にできることは別の話になりますし。医療者は、自分ができることはやってもいいと思う非常にわがままなところがありますね（笑）。そこで、その制度を知っているのは役人さんだからってということで、当時赴任したばかりの高橋さんに頼み、参加してもらったんです。

KNOAHはそういうところからの始まりでした。

森田

JRSもそうですし、KNOAHも、非常に有機的な連携とといいますか、垣根を越えた本音の集まりといえます。KNOAHでは、講演はもちろんのこと、実演もありましたね。ある回では、村岡先生が大人用



もり た きよし
森 田 先生

Profile

宮城県気仙沼市出身。秋田大学医学部・医学科卒業。秋田大学・秋田県内の病院での勤務後、平成7年森田医院6代目を承継。平成16年宮城県ケアマネジャー協会理事、平成23年～気仙沼市震災復興委員、平成26年～一般社団法人気仙沼市医師会会長、同年気仙沼地域包括ケア推進協議会会長、平成30年～宮城県ケアマネジャー協会会長。森田医院理事長・院長として現在に至る。

のおむつをはいたりして（笑）。

村岡

おむつの当て方ね。実際にはくことで、当てられ方もわかったんです（笑）。

森田

人工呼吸器もわかりにくいですが、KNOAHでとりあげて、その仕組みについてレポートをまとめて送って頂きました。資料を見ても勉強になる。実際に行ってみれば、ずっと頭に入る。色々講演会や実技の講習会はありますが、それを凌ぐような非常に素晴らしい勉強会、素晴らしい集まりであると思っています。今回、コロナで集まることができなくなりましたが、“二時間目”で、本音の話が出て次に活かす。それが結果的にいい意味で顔の見える関係に繋がっていきました。圏域の病院との「入院時情報提供の手引き」や、市立病院との「退院へ向けた気仙沼市立病院と介護支援専門員との連携の手引き」や、施設入所の診断書を統一（「介護保険施設（特養・老健）入所に係る共通健康診断書」）しようとか。皆さんがなんとなく思っていたことを、専門機関が少ない地域の中で、効率的に繋げていく流れができてきたのかなと感じています。これは今でも続いています。